

口頭発表「動物飼育作文にみる実感と他との関わり」

中川美穂子

学校での動物飼育はその課題に目を奪われがちだが、動物との交流は子どもたちに感覚を通して人の土台の「人間性・感性」を培うのに重要な働きをする。

1 青少年の課題

東京で「雪のすけ」と名付けられた小学校のウサギを持ち出し、サッカーボール代わりにして、(小学校で飼育係りだった友達が泣いて止めるのも構わず)逃げようとするのを何度も蹴り、殺して川に投げ捨てた高校生があったが、タリウムを使って母親を殺害しようとした少女、町田市で同級生を30分も追い回して50カ所もさして殺した高校1年生、そして抵抗できない小学生をなぶり殺しにするなど、結果への想像力のなさ、弱者を平気でいじめるなど、その卑怯で冷血な心情に大人達は震撼としている。しかも、この子達の共通点は事件の後に改悛の情を示さないことだという。また、05年の犯罪白書では、少年院の経験がある教官たちは「最近増大している少年の問題」として、「思いやりや人の痛みへの理解力・想像力に欠ける」(63%)「対人関係を円滑に結べない」(58%)「感情をコントロールできない」(55%)などを挙げている。

2 対応策として感性を培う

これらへの対策には、幼稚園・小学校などの重要な時期に、命の大切さ、相手への思いやり、優しさなどを「体験を通して培い、人間の土台を創ることが必要」だと言われているが、最近ではこのような問題を起こす青少年はそれを感じる脳神経を幼少時期に養うことが出来なかったのではないかと、つまりその脳神経が欠損しているのではないかと、と脳科学者達が示唆している。

従来はこのような脳神経は、親の愛情のもとで自然や動物との交流を持つことで養うことができていた。特に抱けて目を見つめあい、気持ちを交わせる身近なかわいい小動物により、子どもたちは弱いものを愛して庇うことを覚えて



きた。つまり、常に動物の気持ちを、動物のしぐさや目の色で読み取る努力をしていることが、人の気持ちを思いやる訓練にもなる。また、動物の世話が面倒でも愛情があれば、汚い所でお腹をすかせる動物を放って置けずに頑張ってお話をする。このことは、将来の子育てにもつながっていく。また、我慢しながらも糞を片づければ、「きれいにした所で、喜んで餌を食べる動物の様子に喜びを感じる」など、責任感や勤勉性にもつながっていく。特に、勤勉性は小学校中学年頃に培われると言われている。

なお、命の大切さは、愛着のある特別の存在に死なれた時に初めて気が付く。愛着を培うには、ある程度の期間その対象と一緒に過ごすことが必要だが、この特別の存在として動物が十分に役割を果たすことができる。

3 学校の動物達の重要性と飼育形態の選び方

学校での飼育の目的や在り方から検討すると、大事なものは愛情を重視する形態(愛情飼育)を基本とすることである。他の珍しい動物や家畜の飼育は、維持が大変なので農家や動物園などの活用を考え、学校では飼育数を定めた負担の軽い楽しむ飼育が良いだろう。なお家畜飼育は、基本飼育で動物への感性が養われた後に行う方が効果的で、特に食肉としての家畜は、中学、高校になってから農家の協力を得て行うことで、深い効果を期待したい。小学校では、人への信

頼と愛情を教えることが大事で「子供が情愛をかけている動物を殺してはならない」ということを原則にすべきだろう。

4 基本飼育活用の総合の学習（四年生・西東京市立保谷第二小学校を例として）

保谷第二小学校では、飼育活動を4年生の総合学習に位置づけて、年間36時間で、日常の飼育活動を国語や社会、理科、図工、道徳に関連づけてすすめている。この学校の授業の流れは下の通りである。（参照・動物飼育と教育3号 p 53）。獣医師はこの中の飼育導入授業と2学期の質問コーナーに関わっており、その他、病気時など問題がある時に診療や助言をしている。

(1) 1学期「飼育導入授業」学校のウサギやチャボと仲良くなろう

*目的：飼育を担当する子どもたちに（言葉をもたない）動物たちの気持ちなどへの理解を誘い、これ以後の動物との親しみを湧かせ、思いやりや生命尊重の心が育つ礎とする。また、動物の命が自分たちに係っていることと、同時に獣医師との交流で理科的な刺激を与え、将来の職業選択の幅をひろくする。

*導入部の話しのポイント：①飼育の目的を子ども達に話しながら先生に理解してもらう。②自然の中の動物は、糞と一緒に生活しないきれいな好き。③人間は一日3回食べるのだから、動物も朝お腹がすいている。朝に餌と水を与え、午後にしっかり世話すること。④命に休みはないと休日の対応を伝える。⑤言葉の言えない動物がして欲しい事を、その顔を見て洞察する。⑥動物は人間を怖がっているのだから、静かに動いて優しい気持ちで付き合う。

*ふれあい指導：約10名1班の児童に、1匹の動物と教諭や保護者などの補佐をつける。なお、この後の保護者による支援体制構築を図る。

*注意点：飼育導入授業は、学校固有の飼育動物で行い、その後も子どもの関心を培うようにする。子どもが持ち込む疑問や喜びを一緒に受け取り、時に獣医師に相談して対応すれば、子どもは安心して動物をかわいがり庇う気持ちを培うことができる。

(2) 2学期

1学期から夏休みの間に、飼育に関わった子ども達の様々な関心や質問に学校担当獣医師たちが回答した。質問は、動物の分類、形態、生態、などに関するものから、「なぜ獣医師になったか」まで3クラスのこどもたちから、90問も寄せられ、質問に答えるたびに子どもたちには新たな疑問がわき、「知れば知るほど知りたくなる」状態であった。最後の質問の獣医師になった経緯については、担当の3人の獣医師が、最初に「獣医師になろうか、とかすかに感じた」のは小学校時代であり、その後色々あって、高校になって「昔の夢」を思い出して獣医大学を受けたと話した。子どもたちは、この授業も新聞作りの材料にし、動物飼育に関する作文コンクールに応募した。

(3) 3学期

次学年への「引き継ぎ集会」を4年生が企画進行した。動物の絵や新聞、写真などの資料をしめしながら、動物の個別の性格や特徴、世話のし方を伝えた。その後1ヶ月3年生と一緒に動物の世話をし、実地指導をした。

(4) 作文に表れる動物飼育体験の影響

2学期末の東京都獣医師会と教育委員会の「動物飼育作文コンクール」には、11校から117作文が寄せられた。実際に世話をしている子たちの作文には、糞がにおうような臨場感、自分や友達の気持ち、動物の感情が織り込まれていた。教科に活用している学校では教頭や担任なども登場して「関わりと自他への肯定感」など、飼育を介在した教育の影響が現れていた。また、分量としても実際に動物に関わっている子達の作文は制限の1600文字いっぱいのも多くみられ、保谷第二小学校の4年生10名の応募作品作文の平均字数は1350文字であった。一方、実際には飼育活動をしていない対象校の6年生9作文の平均字数は680文字であり、登場人物も自分一人で他との関わりはなかった。実際に半年も飼育にかかわっている子たちは、心と頭に動物に関する材料がいっぱいたまっており、「知らせたいこと」を苦労なく原稿用紙いっぱいに表示できたのだ、と思う。まず、対象校から掲載する。

「どうぶつ」 6年 対象校（飼育を重視していない）

昨日僕の学校に移動動物園が来ました。正直いって僕はマンションに住んでいるせいか動物とふれ合う機会がありません。「見る」ということはありますが「ふれ合う」といった事は幼稚園の移動動物園以来の気がします。僕は最近動物の病気がはやっているので動物にあまり近づきたくないと思っていました。しかし昨日短時間で動物とふれ合うことになりました。そしてウサギをだこうしたりヒヨコを見たりしました。すると不思議なことに心がだんだんと和みヒヨコ目のなどの可愛らしさにひさしぶりに気付いたのです。このような事は時々あります。例えば祖父母の家に遊びに行った時そこで飼育している金魚を観察したり、えさをあげたりします。すると金魚の意外な一面（この金魚は目のあたりにほくろのようなものがあるとか、腹を上にもむけて泳ぐなど）を発見し妙に親近感をもったりしてしまうのです。他にも学校で亀を飼っているのですが僕にはいつも同じ事をしている生き物にしか見えませんでした。しかし秋になり冬に近づくにつれて、まるで寒さをしのぐかのように、せっかくの箱庭風の石をかたむけ、その下にもぐりこむことが増えてきていることを発見し、「亀も亀なりにがんばっているなあ」と感じ亀が愛らしく見えてきました。

この様に動物は人間の心を豊かにしてくれると思います。また人間もそれを必要としていると思います。人間は科学の発展のためにずい分動植物を犠牲にしてきました。ですから動物が病気をもっていても犠牲にしてきた動物を今こそ科学の力で保護していくべきだと思います。

次は、総合の学習で動物飼育体験を継続している学校からの作文

1 悲しかったけど頑張った飼育 西東京市立保谷第二小学校 4年

ぼくは、飼育をやり始めた時は、「飼育って、面白いかな」なんてことを考えていたり、「戦わせられるかなあ」なんてとんでもないことを考えていました。本当に最初のころは、「つつかれないかな」とか、思っていたもんだからうかつに餌もあげられなかったです。それに、まだそうじとかの細かいやり方も分からなかったから、むずしくてたまらなかったです。

そして、ぼくがだんだん慣れてきたころに、前から具合が悪かったチャボのシルフィーがたおれました。その時は国語の時間で、それを副校長先生が見つけたそうです。ぼくはその時、別の場所で別の事をしていて、池尾先生に教えてもらうまで全然気付かなくて、「えっ本当」という気持ちで教室に行きました。教室についてみると、みんなしいんとしていて、「シルフィーがんばれ」と応援したけど、シルフィーは息も少ししかしてなくて、今にも死にそうでした。でもぼくたちは、ただいのるしか出来なくてほかに何も出来なくて、とても悲しくて、きんちょうして、しかも歯がゆかったです。そして、夫のイエローを連れて来てもあまりこう果がなくて、ようやくじゅう医の先生が来て、お水を飲ませたり、砂とう水を飲ませたりしました。結局、じゅう医の先生が動物病院に連れて帰りました。その日は「シルフィーは大丈夫かな」と、考えていてなかなかねむれませんでした。次の日の朝ちょっと心配しながら学校に行った。そして二時間目あたりに副校長先生が、「シルフィーが元気になりましたよ」と、言いに来ました。ぼくはその言葉で思わず飛び上がりました。その時は心そこうれしかったです。その日中は、もううれしくてたまりませんでした。

でも、それから数日後、とても悲しいお知らせが入りました。なんとシルフィーの病気が悪化し、シルフィーが亡くなったのです。そのことを聞いた時は、悲しさのあまり、ただぼうぜんとしていて、約十秒後ぐらいにはっとしました。「シルフィーは苦しみにたえながら良くがんばった」とか、「なんでシルフィーは今までずっとがまんしたんだろう。そうか、ぼくたちや家族に希望をあたえてくれていたんだ。ありがとう」そんなことがぼくの脳をよぎります。そして、獣医さんは、「君たちのせいじゃないよ」と、言ってくれたのでとてもうれしかったです。そして、シルフィーがなっていた病気は人間の病気で言うと、はいがんだったそうです。ぼくはそんな病気にシルフィーはなっていたんだな、と思いました。そして、そのシルフィーのはいの写真を見てみると、なんと白いできものが沢山できていて、はいの周りをおおっていました。そして、シルフィーのレントゲン写真を見てみるとほとんど空間がなくて、これじゃあ息をするのも大変だな、と思いました。そして、死んだシルフィーの胃ぶくろ辺りをさわると、何も入っていませんでした。多分だけど、息をするのでせい一杯でエサを食べるのも大変だったんだと思います。

今は、シルフィーやウサギのラバが亡くなった事もあり、エサの量や水の量、掃除の仕方や体調チェックに気を使っています。最初のころとくらべてはるかに動物達にもなれ、好きなエサなど分からなかった事が分かって来て、そしてそれを人に伝えられるようになりました。そして、何よりも変わったのが動物に対する気持ちです。最初はきょうみ本位でやっていたのが、今では「もう絶対これ以上他の子達をなくならせないぞ」とか、「責任を持ってやるぞ」という気持ちに変わっています。これからも飼育を頑張りたいです。

2 「命」を見ること 4年

4年生になって飼育が始まった時、きつとかん単にできるようになると思いました。鳥と熱帯魚を飼ったことがあったし、おばあちゃんの家には、年をとった犬がいたから白内障になったり、その他の病気になったときの様子も見ていたからです。また、犬が死んでしまった時のことも覚えていましたから。

でもそれは「見た」だけだったのです。看病したり世話をしたのはおじいちゃんやおばあちゃんやお母さんだったのです。鳥が死んでしまった時、お母さんはスポイトで水を飲ませて手の中であたためていました。私はそれをドキドキしながら見ていました。

それでは学校の飼育ではどうでしょう。自分がさわって、世話をして体の具合に気をつけて鳥やウサギの病気に気づいてあげなくちゃいけません。目が見えないとすごくこわがりになることがわかりました。わかるのは音とにおいだけだから、動物がこわがる音や声は出さないようにしてあげたいと思いました。今でも、シルフィーやラバがびくびくしていたのを思い出します。人間は怖い時には誰かのそばにくっついたりするけれど、動物もそういうことをすることがあります。したくてもそこに家族がいないことの方が多くて、ウサギなどはかわいそうだと思います。

一年生に動物とのふれあいを教えている時、とても怖がっている女の子がいました。体がかたまって動きませんでした。「大丈夫だよ」としか言ってあげられなかったけれど、「動物の方がこわがっているから、急に羽をバタバタしたり、ウサギもビューンと走り始めたりするんだよ。やさしくしてあげれば大じょうぶ」と、言ってあげれば良かったと思えました。私も最初はチャボを持っていませんでしたが、やっと持てた時はふわっとあたたくて、思ったより軽くて少しこわいと思っていたチャボの顔がかわいく見えました。

やっぱり自分がさわって自分が責任を持つと、だんだんかわいいと思う気持ちや、思い出して気になったり心配したりする気持ちがわくなあと思いました。

ただ見るだけでなく自分たちで飼育をすると、「命」をみているんだという気がして、こんなふうにいると動物の気持ちがわかってきました。家で動物を飼う時はもっと私もやらなくちゃと思います。でもそう言う気持ちが強くなると、病気になったり死んだりしたときすごく悲しくなりそうだなあと思います。

一年生がああ授業のあと、チャボの絵を書きました。ふるえて動けなくて下を向いていた子は、きっとほとんど見ていなかっただろうなと思っていました。でも絵を見てびっくりしました。色も形もチャボそっくりでした。いつも飼育をしている私だってこんなに本物と同じにかけると、あまり自信はありません。私だったら、怖かったりあまり興味がない物は、つつい見逃してしまいますが、こわくても観察する力がその子にはあるんだなあと思いました。

「命を見ると言うことはとても幸せを感じるものだけど、その命の重さはとても大きくて、ずっとつづくと考えてた命が消えてしまう時の悲しみはとても大きい。『命』を見ると言うことは喜びも悲しみも味わったと言うことだと思えました。

保谷第二小学校のシルフィーが死んだのは6月末だったが、これら作文は4ヶ月後に書かれているが、少しも色あせていない。それだけこのチャボの死が子どもたちの心に刻み込まれたと言える。

対象校の6年生の作文は、技術的に優れているが、両校、あるいは保護者が子どもたちに育ててきた感性の違いが良く現れていると考えられる。
(全国学校飼育動物研究会 事務局長)

